

行基と竹と文殊のえにし

——『簗山竹林寺縁起』を読む——

森 下 要 治

はじめに

広島県で意外に知られていない文化財の一つに、この簗山竹林寺があるだろう。水面に照り映える厳島のきらびやかさとは対照的に、県中央部の山深く、ひっそりと古色を帯びた佇まいは、およそ人の目を奪う華やかさを持ち合わせていない。かわりに、穏やかな重々しさと、まことに瞠目すべき伝承を備えている。その伝承を記した文献が、今も同寺に所蔵されている。『簗山竹林寺縁起』（絵巻二巻、県重要文化財）である。

他に類例をほとんど見ない物語の主人公は、小野簗。平安前期の歌人にして、地獄と自由に往還したという逸話を持つ伝説的人物である。そのごく一部について既に論じたところであるが、問題は尽きていない。本論に入る前に、縁起物語の概要をごく簡単に紹介しよう。

諸国行脚の行基によって、千手観音を本尊とし、桜山花王寺が開かれた。その後この山に千日詣でした一生不犯の女・八千代は、満願の日、夢に玉をもらうと見、帰途、竹林に生じた筍に嫁ぎを為して懐妊する。こうして生まれたのが後の小野簗である。

幼くして類い希な才能を発揮した簗は都に上り、異能を示して、西三条関白・小野良相の聳となった。

その才学によつて簗は文章博士となり、さらに遣唐使として渡唐。白楽天と対面するなど、名声は天下にとどろき、家は栄えた。

やがて舅・良相が頓死する。危うく第三の冥官・宋帝王に救われ蘇生するが、実はこの冥官こそ簗その人であった。良相の口から妻に、簗が冥官であったことが伝わり、簗は六道の辻から地獄に帰っていった。

その後、一人の化僧が花王寺を訪れ、地蔵十王像を

建立し、姿を消す。この化僧こそ簗の生まれ変わりであり、以後、寺号を簗山竹林寺と改めた。

この物語には明らかに不自然な箇所がある。そのうち、よく取り上げられる「筭」との交接によって簗が生まれる話については、すでに検討を加えた¹⁾。だがその他にも、なぐもがな部分²⁾は少なくない。

たとえば「行基」による「桜山花王寺」開創の逸話である。「行基」は冒頭部に登場するのみである。彼は何のために語られるのか。「行基」を開祖とすることで権威づけが行われているのは当然としても、そのために物語全体として「行基」の逸話が浮き立っていることは否めない。

本稿は前稿に続き、『簗山竹林寺縁起』読解のためのさやかな基礎作業の一つである。

一 全国の「竹林寺」

今、安藝国の竹林寺を問題にしているのだが、実は「竹林寺」の名称は西日本各地に点在している。これらすべての竹林寺に、文献としてのいわゆる「縁起」が残されているわけではない。また仮に残されていたとしても、「縁起」が眼前の現実空間に直接して語られる物語である以上、竹林寺という名を共有して各地に点在する諸寺院の「縁起」

が全く同一のものになるはずがない²⁾（例えば全山の地形的な条件や、堂宇の配置が違えば、それだけで「縁起」の物語も差異を見せるはずである）。しかし異なりを見せつつも、やはりその奥にはある共通の了解事項が横たわっているようである。本稿の一つの眼目は、この共通事項を析出し、その位相の中で『簗山竹林寺縁起』の位置を測定しようというところにある。

さっそく本題に入る。

各種地名辞典などを利用して確認し得た「竹林寺」は、全国に七箇所。見落としもあるうが、その概要を次に一覧しよう。（所在地／名称／宗派（廃は廃寺を示す）／開基の順）

奈良県生駒市／文殊山竹林寺／律宗／行基
岡山県久米南町／竹林寺／真言宗カ／不明
広島県河内町／簗山竹林寺／真言宗／行基（小野簗）
愛媛県伊予三島市／竹林寺／不明（廃）／不明
愛媛県朝倉村／古谷竹林寺／不明／不明
高知市／五台山竹林寺／真言宗智山派／行基、中興空海
熊本県山鹿市／真如堂竹林寺／臨済宗（廃）／麟岳

すでにこれだけで了解できることだが、開祖を「行基」とするものが目に付く。この点については『簗山竹林寺縁

起』も同様で、これは、冒頭に述べた「行基」登場の不自然さを説明する足がかりとなる事実であろう。しかし既に廃寺となったものや内実不明のものは検討から除外されなければならぬ。宗派や開基の類縁から、当面の比較対象は、文殊山竹林寺（生駒市）と五台山竹林寺（高知市）に絞られる。なお『広島県大百科事典』（中国新聞社）には、篁山竹林寺を、行基開基の後弘法大師によって復興され、その折に真言宗に改宗したものと解説するが（「竹林寺用倉山県立自然公園」の項）、いかなる資料によった記述か明らかでない。これが正しい伝承ならば高知・五台山竹林寺の場合と軌を一にすることになる。

この両寺は宗派こそ違え、ともに文殊菩薩を本尊とし、文殊山竹林寺はまた「大聖竹林寺」とも称することから、この両者が文殊菩薩と関わりの深い中国・五台山竹林寺に比して命名され信仰を集めていることは間違いない。『日本霊異記』（上五「信敬三宝得現報縁」）には次のように記されている。

黄金の山とは五台山なり。東の宮とは日本の国なり。宮に還り、佛を作るとは、勝宝応真聖武太上天皇日本の国に生まれ、寺を作り、佛を作るなり。爾の時並びに住む行基大徳は、文殊師利菩薩の反化なり。⁽³⁾

いったん死んだ行基が蘇生し、いわば臨死体験を妻に語った、その夢解きとでもいふべき部分である。この臨死体験

で、「雲の道」を通つてたどり着いた「黄金の山」を五台山とし、また行基その人を「文殊師利菩薩の反化」と意味づけて、「五台山―文殊―行基」という結びつきを導き出している。よく知られるように、この「五台山―文殊―行基」、特に行基の文殊化身説は広く伝承されており、生駒・高知の竹林寺は、この伝承パターンを寺の縁起にそっくり取り込んだものと知られる。問題の篁山竹林寺の場合も、まずこのパターンにそつて語りだしているのである。

二 「行基のえにし」の薄弱さ

しかしこのパターン、いわば「行基のえにし」は、『篁山竹林寺縁起』ではきわめて薄いものとしなければならない。『縁起』の、行基が当地に足跡を残す場面を引用しよう。

茲頃^{コゴニ}藝州豊田郡入野郷有^{ヒレニ}一山、自^{アヤタル}其絶巔^{チン}夜々放^{ヨナヨナ}

光、日々紫雲降^{フスミ}矣、諸人雖^{コレヲ}令^{コト}恠^レ之、無^レ知^ニ其所

由^ヨ、爰^{ヨニ}仁皇四十五代 聖武天皇御宇天平正暦二年^{ヨモノタイイタクラヒニカニラモンミレバ}庚

午^{コロ}中夏之比、行基攀^{メヲク}登彼山峯^{メヲク}、而四方^{ヨモノタイイタクラヒニカニラモンミレバ}為^レ躡竊^ニ以、

東西北大慈之嶺高廻、而留^{メヲク}二十五種善水^{メヲク}、白雲遠雖^レ

隔^{ソウテン}四十由旬^{ソウテン}、蒼天杳々^{ソウテン}矣、三辰之影浮^{ソウテン}玉池^{ソウテン}、南

大悲溪深落、而流^{タニ}二十五種之惡水^{タニ}、青山遙雖^レ隔^ニ

十余里^{タニ}、遠海漫漫^{エンカイマンマントシテ}矣、普陀落見^{エンカイマンマントシテ}眼前^{エンカイマンマントシテ}、独一法界故

無^レ統^ニ於余山^ニ、森羅万像故交^ニ万木枝^ニ、誠是希代不

思儀之勝地也、加^コ之爰^コ在^コ二大桜樹^コ、及^コ二枝一千^コ、而自備^コ二佛形^コ、風鳴^コレ梢者、有^コ二慈眼視衆生福聚海無量之響^コ、茲^{コレ}則先所^コ放^コ光物^コ、誠法性隨緣姿、真如実相理、新覺侍、(繪)則行基菩薩、取^コ二彼桜木^コ、為^コ二御衣木^コ、

自彫^コ二刻千手尊容^コ、而造^コ二立一字精舎^コ、名号^コ二桜山花王寺^コ、述^コ二供養会^コ、

この地(入野郷)が聖地であり、自ずから仏法の理を顕していることを述べて、問題の傍線部に至る。この山にあった桜の大樹をもって行基が千手観音を彫り「桜山花王寺」と称した、というのである。ここには「文殊菩薩」も「竹林寺」も現れない。生駒や高知の竹林寺が文殊菩薩を本尊とするのは、言うまでもなく、行基の文殊菩薩化身説や竹林寺という寺号そのものに関わっている。同様に篁山竹林寺の縁起に行基が登場するのは先に確認したパタンによっているとしても、それではその行基が自ら彫る尊像はなぜ「千手観音」なのであろうか。またこれがひとまず「桜山花王寺」と名付けられるのはなぜであらうか。

こうした問題に行き当たるとき、この篁山竹林寺の場合、生駒や高知の竹林寺の場合と明らかに異なる事情をはらんでいると気づかざるを得ない。これらについては後に論じる。

「行基のえにし」は、本来文殊菩薩と「竹林寺」という呼称に結びつくべきものではないか。生駒・高知の竹林寺に比して、小野篁の登場を待って「竹林寺」の名号を

得るという『篁山竹林寺縁起』の場合、篁を介在させるぶっただけ「行基のえにし」が希薄な物語となっている。

三 「竹のえにし」

翻って、竹林寺と「竹のえにし」について論じてみたい。『篁山竹林寺縁起』における竹(筍)の問題については、すでに前稿で述べたところであるが、確認の意味も含めてその要点についてだけ、再度触れておきたい。

この『縁起』は、竹林寺の草創に関わる物語としては、寺号の「竹林」「竹」についての記述に乏しい。山号にもなっている「篁」の名は小野篁に由来するものであり、「タカムラ(篁・竹村・竹群)」という名自体は確かに「竹林」と深く結びつく語である。しかし言葉の上での関連に比べて、物としての「竹」との縁が希薄だと感じられるのである。その上で、この『縁起』の中すでに諸氏が注目されている⁶、「処女と筍が交わって、篁が誕生する」話柄こそ、物として『縁起』に登場するほとんど唯一の竹(筍)のありかと考えた。そしてこれが現代にも伝わる昔話「竹の子息子」と構造上通いあうことから、この話柄が在地の口頭伝承と関係を持ちつつ、後に『縁起』の中に滑り込んだ話譚であると結論づけている。

しかしそのとき私としては、次の問題にも言及しておく

べきであつた。それは『篁山竹林寺縁起』だけでなく、生駒にしろ高知にしろ、そもそも竹林寺という名の寺の縁起に、物としての竹との関わりはほとんど無用だったのではないか、ということである。

試みに生駒山竹林寺に関わる二資料に目を向けよう。

文暦二年九月の奥書を有する『生駒山竹林寺縁記』は、行基やその母が「僧慶恩」なる人物に託宣するかたちで記されているが、そのうち物としての竹は行基母の託宣にわずか一箇所現れるのみである。

(行基)菩薩御母儀。又託慶恩曰。示舍利在所。何有疑心哉。且如先度告。可尋善光寺。件堂東南二面有池。西北二方有竹。南面有浮橋。記文者。彼堂之在自西第二柱中^{云云}。

文中の「善光寺」は、和泉国大鳥郡の寺。「善光寺に記文有り。紺紙五枚にこれを書く」という行基の託宣に疑いを成す人々に対する言葉である。この中に「竹」と見えるのが唯一の例だが、ほとんど問題にならない。もう一つ、『竹林寺略録』(嘉元三年閏十二月奥書)にも、生駒山の聖地たるを記して

山榮^ニ林木^ニ。谷流^ニ泉水^ニ。青松^ニ飴^レ峰。翠竹^ニ蔽^レ谷。⁽⁷⁾

との記載があるのみ。「青松」に対して「翠竹」を配し、「山」「谷」と併せて生駒の景を叙する言葉であるに過ぎない。

前にも述べたように、生駒や高知の竹林寺は、行基の文殊化身説と連接して、「五台山―文殊―行基」のパタンに沿うかたちで草創を解けばよかったのである。中国の五台山竹林寺という本があれば、行基との結びつきを持つだけで草創の物語を仕立てることができたはずだ。こうして見てくると、物としての竹(筍)との関わりをあえて解く篁山竹林寺の場合の方が、むしろ不自然にも感じられるのである。

結局、前稿で『篁山竹林寺縁起』に感じた「竹」のイメージの希薄さは、「五台山―文殊―行基」という前提が薄弱だからこそ問題になることだったと言えそうである。竹林寺という寺号と文殊・行基とが絡み合う固定的なイメージが必ずしも緊密に表現されていないから、寺号に結びつく「竹林」や「竹」のイメージが他に必要だったのだ。前稿への補訂として記しておきたい。

四 「文殊のえにし」(その一)

煩瑣で混乱した記述が続いたので、これまで述べ来たつたところをひとまず整理し、まとめておく。

『篁山竹林寺縁起』はその山号が如実に示す通り、小野篁にまつわる在地(寺)の伝承がその中核を成す物語である。しかし「竹林寺」という寺号は、その一方で「行基開

「基」という伝承をも必要としていた。「簗山竹林寺縁起」もその点同様だが、簗に関する説話に比べて、文量もその印象も微々たるものである。また「竹林寺」と行基の関係に欠かせないと考えられる本尊の文殊菩薩は登場せず、替わって千手観音が行基によって刻まれている。結果として『簗山竹林寺縁起』全体は

・行基による「桜山花王寺」の開基

・小野簗の縁による「簗山竹林寺」への山号寺号の変更という二つの部分が、肌分かれしたように併存する状態に陥っているのである。加えて簗に関する説話の中には、物としての竹を登場させるべく「処女と筍との嫁ぎ」譚が挿入され、併せて三つの説話要素が混在することとなった。恐らくは「行基開基」の説話、一連の簗説話、「処女と筍との嫁ぎ」譚という三つの部分がそれぞれ別個の事情によって取り込まれ、「三元的成立基盤」とも言いうる様相を呈しているのである。

以後の検討では、この「三元的成立基盤」の三要素（こ）に行基の説話と簗の説話の関係について）が実は深層で深く関係を持ちつつ絡み合うことを論じることになる。

行基と簗の関係を取り立てるとき直ちに気付かれるのは、行基のみならず簗もまた、文殊菩薩の化身という伝説を担う人物であるということだろう。よく知られている『帝王編年記』の簗没記を引こう。

参議小野簗薨。春秋五十一。へ身長六尺二寸。簗者三守六臣之智也。大臣頓死。簗昼在_二日本国_一。夜在_二閻魔_一。為_二冥官_一。申_下請此大臣有_中可_レ書_二大般若_一之願_上云云。大臣即蘇生。或説云。簗者二生人也。文殊化身也。（仁寿二・十二・二十二条）

「或説云」とあることからわかるように、簗は古くから多くの伝説に包まれた人物であり、こうした伝説があるからと言って、『簗山竹林寺縁起』がその影響下にあると断言はできない。しかし簗に関して『簗山竹林寺縁起』は次のような場面をも準備していた。

如_レ此不_{コトモナク}説万説、不_レ知万知賢才成、任_二文章博士_一、度々唐使渡、或時対_二白樂_一、白語云、簗雖_レ為_二才人_一、不_レ及_二李嶠智恵_一云、于時即簗氣色惡敷、李嶠一期第一詩被_レ出見申、其時此詩出、：

才を認められて遣唐使となった簗が白樂天と会い、詩について問答をした、というもの。以下、簗が詩を作り、白樂天を感激させた話譚が続く。まったくのフィクションだが、あえて簗と白樂天を対面させる意図を探ろう。

二人の卓抜した詩才を語って簗を顕彰しようとしているのは勿論だが、今一つ、白樂天が、これもまた文殊の化身とされていることと無縁であるまい。慈円の『拾玉集』の「文集百首」末尾に次のように見える。

から国やことのは風の吹きくればよせてぞ返す和歌の

うら浪

(二〇〇七番)

樂天者文殊之化身也、当和彼漢字和歌者神国之風俗也、(以下略)

ここにすでに白樂天を文殊の化身とする文言が見えるから、樂天文殊菩薩化身説は少なくとも鎌倉初期にさかのぼる伝承である。右の「文集百首」の場合は漢詩に対する和歌という対比の発想が作品形成のモチベーションとなつている訳だが、樂天文殊菩薩化身説を前提として「『から国』の代表・白樂天に対する和国の代表は」というように対比の視点がずらされれば、こうした対比発想自体が特定の日本人の名前を絡め取って行く構図が容易に生まれよう。いわば「文殊のえにし」が二人を番える大きな要因となっている¹⁰と思うのである。

また黒木香氏が述べるように、篁の文殊菩薩化身説は、この『篁山竹林寺縁起』の冥官説話とも深く関わっているから、本縁起における篁文殊菩薩化身説の影響は、物語全体を覆っているものと認めて間違ひなからう。

「文殊のえにし」が篁と行基を結びつけ、さらに白樂天をも絡め取る構図が見えている。しかし問題の千手観音については、どう考えるべきだろうか。

五 「文殊のえにし」(その二)

千手観音の問題に直接切り込む前に、興味深い話題を紹介したい。本稿第一節に一覧した全国の「竹林寺」のうち、岡山県久米南町の竹林寺に関わる伝承である。今便宜上、「日本歴史地名大系 岡山県の地名」(平凡社、「仏教寺」の項)の記載を引用する。

(仏教寺の) 現在の本堂は近世初期の建造とされ、もとは文観の持仏堂で、竹林寺と称したという。

たったこれだけの記述だが、大きなヒントを与えてくれるように思う。最大のポイントは、文観という僧侶と「竹林寺」なる呼称との関係である。

久米南町は津山市の南に当たる。津山市内の中国自動車道院庄インターチェンジの近くには、北条氏によって隠岐へ送られる後醍醐天皇と児島高德の伝説を残す作樂神社がある。久米南の地は旧出雲街道の要衝・津山に程近く、後醍醐との因縁も浅からぬものがある。すると右の「文観」という僧侶は、吒枳尼天修法で後醍醐に取り入ったとされる、あの文観を指すと見てよいだろう。

文観については田中貴子氏に詳しい論考があるので、そちらを参照されたい。¹²ただかの吒枳尼天行者・文観と「竹林寺」という呼称の結びつきを、ここでは重視しておきた

いのである。

篁山竹林寺に話を戻して、結論から述べよう。『篁山竹林寺縁起』の物語には、恐らく中世真言宗（あるいはその一部）で醸成された教義が、深層部において横たわっているものと考えたい。文殊の化身である行基・篁、またその行基が彫り上げる本尊千手観音。じつはいずれも一筋の論理で結びつけられたものであると推測されるのである。

実例を挙げつつ、順に述べよう。

田中氏も挙げられているものだが、院末鎌初の学僧によって成った「諸経法・諸尊法・灌頂などに関する諸師の口伝を中心にして、経軌・章疏・古記録を参照して書きつづけた研究書」といわれる『覚禅抄』には、次のような文言が見える。

御抄云。有抄出云。愛染王者。即吒枳王也。云々。

（第五明王部愛染下「吒枳王事」⁽¹⁴⁾）

「吒枳王」については田中氏の言われるとおり、「正体は不明」しかし「吒枳尼天との名前の相通は明らか」⁽¹⁵⁾である。愛染明王と吒枳王（吒枳尼天）との関係が示唆されている。同じ『覚禅抄』には、愛染明王に関してさらに次のような文言も見えている。

経云。内縛。痛^ニ指節^ニ。拜^ニ逼^ニ堅^ニ空^ニ。是名^ニ破七曜一切不祥印^一。当^ニ下^ニ觀^ニ妙吉祥印^一作^中降伏事^上。結印誦^{レハ}二百遍^一。不^{シテ}久即成就^ス。云々。

（第五明王部愛染上「妙吉祥破諸宿曜」）

よくわからない部分が多いが、要するに愛染の法に関して「破七曜一切不祥印」なる結印の法があり、それと「妙吉祥印」とが関係するのであろう。ここで見逃せないのは「妙吉祥」の名である。「妙吉祥」あるいは「吉祥金剛」とは、まさに文殊菩薩を指し示す異称である。つまり『覚禅抄』の論理では、愛染明王を介して吒枳尼天と文殊菩薩とが結びつきうる、ということだ。これはやや三段論法めくが、『溪嵐拾葉集』はもつと直接的である。

一。以此天（吒枳尼天）法花一体習事 示云。此天ハ

大聖文殊ノ化現也。以^ニ文殊^一法花教主^ト習時^ノ配^ニ当^ニス本迹二門^一。 （卷第三十九「吒枳尼天秘決私苗」⁽¹⁶⁾）

ここでは明らかに文殊菩薩と吒枳尼天とを同体視している。吒枳尼天は稻荷神と習合するが、その伏見・稻荷山には早くから「文殊堂」があり、かの金春禅竹が稻荷詣でに際して、「稻荷社中文殊堂」に参籠したことが知られている。⁽¹⁷⁾これによっても吒枳尼天―愛染明王―文殊菩薩の結びつきの深さが推し量られよう。

『覚禅抄』には、さらに興味深い指摘が見えている。

実任云。千手愛染王同佛也。深秘。イ云云。

（第三観音部千手「先跡事」）

すなわち千手観音と愛染明王を同体と見る説である。ほかに千手と愛染とを同体と見る説を寡聞にして知らないが、

これらの資料（殊に『覚禪抄』の論理）によつて見れば、『篁山竹林寺縁起』にある一定の脈絡を見出すことができるようになるのである。文殊のえにしが行基・篁・白楽天を呼び込む、吒呌尼天―愛染明王―文殊菩薩そしてこれらと千手観音の結びつきが行基に千手観音を彫らせる。また文殊菩薩が地藏信仰の中で「文殊宗帝王」と呼ばれ、篁の「第三冥官・宋帝王」の説話となる。

愛染明王を中心とする同体説・習合説を背後に抱えながら、その舞台の上で文殊のえにしが行基や篁を縁起物語に呼び込んだ。そうした大きな構図を読みとることは不可能であろうか。

六 「地獄」と「竹」と

舅である関白良相を地獄で救った篁は、良相から妻に、自分が「第三冥官」たる事が明かされると、地獄へ帰つて行つた。『篁山竹林寺縁起』の、そのくだりである。

其時小野篁思、吾是雖為二十天之大王、為二度衆生、如此為再誕、今鄙小国之臣謂事口惜覺物哉、齡五十一歲剋、則彼御所立去給、姫君騒而大臣告御座、可レ留由仰覺、姫君泣々続追給、東山指逃侍、愛宕寺之前而大地蹴破而地底入畢、彼靈穴在二于今（中略）自其以降彼所名六道之辻、是則炎魔王宮

ト申伝侍、

注目すべきは「六道之辻」への言及である。『縁起』ではこれを「愛宕寺之前」と当てているが、現在知られるところでは、京都東山の六道珍皇寺をこれに比定してよいだろう。六道珍皇寺には『珍皇寺参詣曼荼羅』（一幅）が蔵されている。これによると図様の右上隅に井戸が描かれ、「小野乃たかむらめいとへの御かよひのい□□」と記されており、『篁山竹林寺縁起』と同様に、篁冥官説がこの寺の伝説に滑り込んだものと知られる。珍皇寺と篁の結びつきがどこまで遡りうるものか明らかでないが、少なくとも六道の辻という呼称が定着してのち、『篁山竹林寺縁起』の話譚が生じたのでなければならぬ。

またそのすぐ下には「六ほん竹」が描かれている。この「六ほん竹」にまつわる逸話については明らかにしがたいが「竹」という素材そのものは『篁山竹林寺縁起』に描かれた竹林の笋と重なり合うものと見てもよからうか。なおこの「六ほん竹」については（熊野）観心十界図の不産女地獄の竹が連想される」との指摘がある。¹⁸大いに注意を寄せるべきであろう。小峯和明氏もこの点を指摘し、

八千代なり醜女なりが竹林で笋とついでなのは、室町以降の地獄絵の絵解きで急速に流行する、竹林で不産女が苦しみを受ける説話と関連するのではないかと述べられている。¹⁹女が素手で竹林を掘り返す苦しみとい

う不産女地獄が、「一生不犯」(つまり本来ならば「不産女」として一生を終えるはず)の八千代が篁を身ごもり産み落とす場に反転する。先に私は「竹林寺という寺号と文殊・行基とが絡み合う固定的なイメージが必ずしも緊密に表現されていないから、寺号に結びつく「竹林」や「竹」のイメージが他に必要だった」と論じたが、その時必要とされたイメージこそ、地獄と結びつく「竹」であった可能性は高い。「地獄」と「竹」をめぐる中世の想像力を掘り起こすことが次には必要となるが、今はその用意がない。

おわりに

むろん、右に示した資料群が『篁山竹林寺縁起』に直接の影響を与えていると言いたいわけではない。しかし、中世真言宗が醸成した佛達の結び合いや(恐らく絵解きを媒介にして広がった)「地獄」と「竹」を結ぶイメージをこの縁起に重ね合わせてみると、それまで見えてこなかった物語の脈絡が浮かび上がってくることは間違いない。恐らくはこうした真言の学問研究の成果が深々と横たわり、また一方で熊野比丘尼達によって「地獄」が説いて回られるような宗教文化を抜きにして、この縁起を説明し尽くすことはできない。仏教世界における学問研究と絵解きに語られる「地獄」のイメージがいかに絡み合っているのか。この

問題に立ち向かうのに、『篁山竹林寺縁起』は恰好の材料を提供してくれよう。

宗派で言えば真言のみに注目しているようだが、もちろん律宗の動きにも無関心ではいられない。行基・篁・白楽天を結んで浮かび上がる文殊菩薩の影は、中世西大寺の非人救済の支えである文殊信仰との響き合いを連想させる²⁰。この点、本稿はじめに確認した、生駒山竹林寺が律宗であることに注意すべきである。詳細な論述はすべて他日を期すほかないが、篁山の場合に限らず、竹林寺と名の付く寺院の縁起を総合的に検証する必要がある。

まとまりのないまま終始した。基本的な認識に誤りが多からうことを恐れる。

注

- (1) 拙稿「小野篁の誕生―『篁山竹林寺縁起』を読む―」(『論考平安王朝の文学―一条朝の前と後―』新典社、一九九八・一〇)において、同縁起の篁誕生譚の特異性と生成プロセスの一端、またその必然について私見を述べた。参照を乞う。

- (2) 「縁起」の物語は、当然のことながら、その寺の由縁起源を物語るものである。従って物語の構造上、まず物語られる出来事が存在し、その出来事に基づいて、今眼前にある地形や建築が意味づけられる、という表現の特色を持つ。しかし多くの場合、実際は、眼前の地形や建築

が人間の想像を呼び起こし、想像に基づいてしかるべき出来事が付会され、物語化されるというプロセスを辿って生み出されるはずである。多くの参詣曼荼羅に見える地獄の図など、その典型と考えてよからう。この場合、むろん現前の景に触発された人間の想像が、期せずして重なり合うことはありうる。

- (3) 岩波日本古典文学大系の訓読文による。なお表記は私に改めた箇所がある。

- (4) 『瀬戸内寺社縁起集』(中世文芸叢書)による。以下同じ。なお稿者は平成九年九月、『縁起』を調査する機会を与えられており、その際の調査記録を補助的に用いている。訓点・振り仮名などについては、私に取捨し、改めた箇所がある。本資料は『広島県史 古代中世資料編IV』にも翻刻掲載されている(絵は省略)。

- (5) 注(1)に同じ。

- (6) 注(4)『瀬戸内寺社縁起集』解題の友久武文氏や、いずれも小峯和明氏「世界のへんげ」―説話のおもしろさ―(『国文学解釈と鑑賞』平成五・一二)「竹から生まれた篋」(『日本文学語学論攷』翰林書房、平成六・一二)「説話と注釈―『歌行詩』の野馬台詩注から―」(『和漢比較文学叢書 説話文学と漢文学』汲古書院、平成六・一二)などが主なところであろう。

- (7) 両書の引用は、いずれも『大日本仏教全書 寺誌叢書第三』による。

- (8) 『新訂増補国史大系』(吉川弘文館)による。

- (9) 『新編国歌大観 第三巻』(角川書店)による。なお楽天

文殊化身説は、『十訓抄』第七序にも見える。

- (10) 篋と白楽天を番えること自体はすでに『江談抄』に見え、これを承けて『古事談』にも述べるものである。従って『篋山竹林寺縁起』がこのような既存の説話・伝承から取材したことは疑えないが、この『縁起』がそうした既存の説話・伝承を選び取った発想源を問題にしたいのである。

- (11) 黒木氏「小野篋の変貌―冥官説話の変化をめぐって―」(稲賀敬二氏編『源氏物語の内と外』風間書房、昭和六二・一二)参照。

- (12) 田中氏「外法と愛法の中世―吒天行者の肖像―」(『日本文学』平成三・六)、のち同氏「外法と愛法の中世」(砂子屋書房、平成五・六)に補訂の上、収められた。ここでは後者によっている。

- (13) 『国史大辞典』(吉川弘文館)「覚禅抄」の項。

- (14) 『大日本仏教全書 覚禅抄』による。以下同じ。

- (15) 田中氏「小野仁海と中世王権の成立―『溪嵐拾葉集』所収「祇園女御説話」の背景・続攷―」(『国文学攷』一一五号、昭和六二・九)、のち同氏注(12)書に補訂の上、収められた。ここでは後者によっている。

- (16) 『大正新修大蔵経』による。

- (17) 伊藤正義氏『金春禅竹の研究』(赤尾照文堂)に詳しい。

- (18) 大阪市立博物館編『社寺参詣曼荼羅』(平凡社、昭和六二・一二)「単色図版・解説」の「33 珍皇寺参詣曼荼羅」の項。

- (19) 注(6)小峯氏論文のうち「竹から生まれた篋」に指摘

されている。

(20) 田中氏注(12) 書にも、吒枳尼天と文殊菩薩の關係を説いて、文殊信仰に基づく觀尊らの非人救済と吒枳尼天信仰との関わり合いを追求すべきことが論ぜられている。首肯すべきであろう。

へ 彙 報 へ

平成十年度広島文教女子大学国文学会大会

日 時 平成十年九月二六日(土) 一三時〇〇分より
場 所 広島文教女子大学大講義室

【研究発表】

◇自主ゼミ活動報告

◇古典文法指導に関する研究

本学大学院修士二年 上野 由佳

◇現代日本語における反義語について

本学専任講師 黒木 晶子

◇書教育の現状について

本学専任講師 森 哲之

【フォーラム】

◇ひろしまの『風土・言葉・文化』

本学教授 友定 賢治

本学教授 友久 武文

広島女学院大学教授 藤井 昭

広島民俗研究家 神田 三亀男